

## 巻頭言

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 一橋大学国際教育交流センター 公開日: 2023-08-02 キーワード: 作成者: 阿部, 仁 メールアドレス: 所属: 一橋大学
URL	<a href="https://doi.org/10.15057/79967">https://doi.org/10.15057/79967</a>

## 巻頭言

国際教育交流センター長 阿部 仁

2022 年後半から米国や欧州への出張機会が復活した。出張先ではとうにコロナは過去のものとして扱われていたが、帰国するたびに空港スタッフが物々しい防護服、フェイスガード、フルマスク姿で到着客を迎え入れる姿を見て、自分の乗ってきた飛行機は 2 年前にタイムスリップしたのだろうか、と思うほどの違和感を覚えた。学生国際交流が本格的に再開され、インバウンドの外国人留学生や、アウトバウンドの派遣留学生も「ウィズコロナ対応の時差」には少なからずショックを受けたことだろう。学内においてこの変化を最前線で感じ取っていたのは国際教育交流センターであると考えている。

2022 年度は春学期からは派遣および受入留学の双方でほぼコロナ渦以前の状態に戻り、秋冬学期には過去最大のインバウンド交流学生を受け入れるまでの盛況となり、対応する教職員や学生スタッフ人員のやりくりが常に悩みの種であった。つくづく、私たちの仕事には変化に対応する柔軟性、迅速性、弾力性が求められることを再認識した次第だ。これらの状況変化を踏まえ、2022 年度にセンター運営にかかわる日本語教育部門、留学生・海外留学部門、および全学共通教育センターの国際交流科目部門が取り組んだ主な事業について振り返りたい。

日本語教育部門では、2021 年度までとは打って変わって、多くの科目で対面授業が実現し、全面オンラインの授業はゼロとなった。春夏学期の初期は対面で受講する学生とオンラインで受講する学生が混在するハイフレックス型の授業を多くの科目で実施したものの、学期が進むにつれ、全面対面授業に移行した。秋冬学期はほぼすべての科目で全面対面授業となった。オンラインを活用した授業でも、対面授業でも、留学生の授業に対する満足度は例年と変わらず高く、先生方には感謝申し上げたい。また、オンライン日本語プレイスメントテストは 2022 年度秋冬学期で 5 回目の実施となり、実施体制を確立しつつある。

留学生・海外留学相談室では、2022 年 2~4 月に 3 名の相談員が入れ替わったが、対面とオンラインのハイブリッド相談の柔軟な運営を継続し、留学相談や在留資格相談サービスの質・量を維持することができた。渡日した交流学生の増加にともない、日本人学生と外国人留学生が参加するランゲージコミュニティの稼働状況が前年比で 2 倍近くとなり、学内国際交流のハブ（中継点）としての存在感を示す一年となった。外国人留学生向けの日本語による学習・添削支援では、学生の要望に基づき論文チューターワークショップを秋冬学期に二回（従来は一回）開催した。

国際交流科目部門では、過去 2 年間とは異なりほとんどの科目が対面授業となり、春夏学期の初期のみ、来日できていない留学生に配慮するためにオンライン授業を行った。秋冬学期は完全対面授業となり、全科目において過去 2 年間に比して履修者が大きく増えた。

また、非常勤講師の年齢制限厳格化により、順次非常勤講師の交代を進めていたが、それにも目途がたった。

これらの取り組みを踏まえ 2023 年度の国際教育交流センター展望について考えたい。日本語教育部門では全ての授業が原則対面に戻ったことから、日本に来て日本語を学習する意味を教員全員が改めて認識し、学生たちとともに本学の日本語教育を再構築していく。また、過去 2 年間で培ったオンライン型、ハイフレックス型などのさまざまな授業のノウハウを活用し、社会状況の変化に柔軟に対応できる体制を整えたい。オンラインプレイズメントテストについては実施時期および体制の効率化を検討し、安定的な運用を図る。

留学生・海外留学部門では、2023 年度も引き続き多様性豊かなキャンパスの国際化をさらに進めるため、学生間国際交流活動を推進する。具体的にはランゲージコミュニティを週 2 回から 3 回開催へ増やす。また、交流学生のための短期インターンシップへの日本人学生参加についても検討を行う。外国人留学生のための日本語による学習・添削支援では、日本語添削チューターサービスの稼働率（現在 5 割弱）をさらに高めるために各種 PR 活動を展開する。

国際交流科目部門では、2023 年度に非常勤講師の若返りが実現できることになる。これにより、しばらくは年齢制限に影響されないような体制ができる。また、HGP の国際交流科目における交流学生の過度な履修者集中を軽減し、交流学生が 4 学部提供の専門教育科目をもっと履修してくれるような方策を練りたい。これにより、英語による専門教育科目の履修者数を増やすことも可能になる。HGP とは別枠であるが、大学院の英語による科目のリストが 2023 年度から教務課で提供されることは交流学生の受入れに大きく寄与することになる。

最後に、2023 年 3 月をもって日本語教育部門長として 7 年間に渡って尽力くださった柳田直美先生が退職され、同 4 月より早川杏子先生が国際教育交流センターの准教授として同部門に着任し、日本語教育部門長を庵先生が引き継ぐこととなった。また、早川先生の後任には、鈴木小百合先生が同部門の特任講師として着任され、主に交流学生を対象とした日本語科目のコーディネーターを担当する。柳田先生にはこの 7 年間、日本語教育部門の運営において幾多もの難局を舵取りいただき、言葉では表しきれないほどの感謝の気持ちで一杯である。深くお礼を申し上げるとともに早稲田大学での更なるご活躍を期待したい。

2023 年度の国際教育交流センターは専任教員 6 名（阿部、庵、西谷、太田陽、早川、塚田）、特任教員 2 名（ツオイ、鈴木）の 8 名体制を維持する形となった。過去最大の交流学生の受入れに対応すべく、失敗を恐れず試行錯誤を続け、本学における学生国際教育交流の更なる発展を目指す。

2023 年 5 月